

アラビヤンナイト

一、アラジンとふしぎなランプ

菊池寛

青空文庫

昔、しなの都に、ムスタフという貧乏びんぼうな仕立屋が住んでいました。このムスタフには、おかみさんと、アラジンと呼ぶたった一人の息子むすことがありました。

この仕立屋は大へん心がけのよい人で、一生けんめいに働きました。けれども、悲しいことには、息子が大だいのなまけ者で、年が年じゅう、町へ行つて、なまけ者の子供たちと遊びくらしていました。何か仕事をおぼえなければならぬ年頃になつても、そんなことはまっぴらだと言つてはねつけますので、ほんとうにこの子のことをどうしたらいいのか、両親もとほうにくれてゐるありさまでした。

それでも、お父さんのムスタフは、せめて仕立屋にでもしよう
と思いました。それである日、アラジンを仕事場へつれて入って、
仕立物を教え^{おし}ようとしたが、アラジンは、ばかにして笑って
いるばかりでした。そして、お父さんのゆだんを見すまして、い
ち早くにげ出してしまいました。お父さんとお母さんは、すぐに
追っかけて出たのですけれど、アラジンの走り方があんまり早い
ので、もうどこへ行ったのか、かいもなく、姿は見えませんでした。
「ああ、わしには、このなまけ者をどうすることもできないのか
。」

ムスタフは、なげきました。そして、まもなく、子供のことを
心配のあまり、病気になって、死んでしまいました。こうなると、

アラジンのお母さんは、少しばかりあつた仕立物に使う道具どうぐを売りはらつて、それから後は、糸をつむいでくらしを立てていました。

さて、ある日、アラジンが、いつものように、町のなまけ者と一しよに、めんこをして遊んでいました。ところがそこへ、いつのまにか背せいの高い、色の黒いおじいさんがやつて来て、じつとアラジンを見つめていました。やがて、めんこが一しようぶ終つた時、そのおじいさんがアラジンに「おいで、おいで」をしました。そして、

「お前の名は何と言うのかね。」と、たずねました。この人は大へんしんせつそうなふうをしていましたが、ほんとうは、アフリ

カのまほう使でした。

「私の名はアラジンです。」

アラジンは、いったい、このおじいさんはだれだろうと思いがら、こう答えました。

「それから、お前のお父さんの名は。」また、まほう使が聞きました。

「お父さんの名はムスタフと言って、仕立屋でした。でも、とつくの昔に死にましたよ。」

と、アラジンは答えました。すると、この悪者のまほう使は、

「ああ、それは私の弟だ。お前は、まあ、私の甥おいだったんだね。

私は、しばらく外国へ行っていた、お前の伯父おじさんなんだよ。」

と言つて、いきなりアラジンをだきしめました。そして、

「早く家へ歸つて、お母さんに、私が会いに行きますから、と言つておくれ。それから、ほんの少しですが、と言つて、これをあげておくれ。」と言つて、アラジンの手に、金貨きんかを五枚にぎらせました。

アラジンは、大いそぎで家へ歸つて、お母さんに、この伯父さんだという人の話をしました。するとお母さんは、

「そりやあ、きつと、何かのまちがいだろう。お前に伯父さんなんか、ありやあしないよ。」と、言いました。

しかし、お母さんは、その人がくれたという金貨を見て、ひよつとしたら、そのおじいさんはしんるいの人かもしれない、と思

いました。それで、できるかぎりのごちそうをして、その人が来るのを待っていました。

まもなくアフリカのまほう使は、いろいろめずらしい果物や、おいしいお菓子をどっさりおみやげに持って、やって来ました。

「なくなつた、かわいそうな弟の話をしてください。いつも弟がどこに腰こしかけていたか、教えてください。」

と、まほう使は、お母さんとアラジンに聞きました。

お母さんは、いつもムスタフが腰かけていた、長いすを教えてやりました。すると、まほう使は、その前にひざまずいて、泣きながらその長いすにキツスしました。それで、お母さんは、この男はなくなつた主人の兄さんにちがいない、と思うようになりま

した。ことに、このまほう使が、アラジンをなめるようにかわいがるのを見て、なおさら、そうときめてしまったのでした。

「何か、仕事をしているかね。」まほう使がアラジンにたずねました。

「まあ、ほんとうに、おはすかしゆうございますわ。この子は、しよっちゆう町へ行つて、遊んでばかりいまして、まだ何にもしていないのでございますよ。」

お母さんが手をもみながら、そう答えました。

アラジンは、伯父さんだという人が、じつと自分を見つめているので、はずかしそうに、うつむいていました。

「何か仕事をしなきゃあいけませんな。」

まほう使は、こうお母さんに言っておいて、さて、こんどはアラジンに、

「お前はいつたい、どんな商売がしてみたいのかね。私はお前にごふくみせ呉服店を出させてあげようと思っっているのだが。」と、言いました。

アラジンは、これを聞くと、うちようてんになつてよろこびました。

あくる日、伯父さんだという人は、アラジンに、りっぱな着物を一そろい買つて来てくれました。アラジンは、それを着て、この伯父さんだという人につれられて、町じゆうを見物して歩きましました。

その次の日もまた、まほう使はアラジンをつれ出しました。そして、こんどは、美しい花園はなぞのの中を通りぬけて、田舎いなかへ出ました。二人はずいぶん歩きました。アラジンは、そろそろくたびれはじめました。けれども、まほう使がおいしいお菓子や果物をくれたり、めずらしい話を次から次と話して聞かせてくれたりするものですから、大してくたびれもしませんでした。そんなにして、とうとう二人は山と山との間の深い谷まで来てしまいました。そこでやっと、まほう使が足をとめました。

「ああ、とうとうやって来たな。まず、たき火をしようじやあな
いか。かれ枝を少し拾ひろって来ておくれ。」と、アラジンに言い
ました。

アラジンはさつそく、かれ枝を拾いに行きました。そして、すぐ両手にいっぱいかかえて、帰って来ました。まほう使は、それに火をつけました。かれ枝は、どんどんもえはじめました。おじいさんはふしぎな粉を、^{こな}ポケットから出しました。それから、口の中で何かぶつぶつ言いながら、火の上にふりかけました。すると、たちまち大地がゆれはじめました。そして、目の前の地面がぱつとわれて、大きな、まっ四角な平たい石があらわれてきました。その石の上には、輪^わがはまっていました。

アラジンはこわがって、家へ走って帰ろうとしました。けれども、まほう使はそうはさせませんでした。アラジンのえりがみつかんで、引きもどしました。

「伯父さん、どうしてこんなひどいことをするんです。」アラジンは泣きじやくりながら見上げました。

「だまって、私の言う通りにすればいい。この石の下にはたからも宝物があるのだ。それをお前に分けてやろうというのだ。だから私の言う通りにおし。すぐに出て来るからな。」

と、まほう使が言いました。

宝物と聞くと、アラジンは今までのこわさはすっかり忘れて、よろこんでしまいました。そして、まほう使の言う通りに、石の上の輪に手をかけると、石はぞうさなく持ち上りました。

「アラジンや、ごらん。そこに下へおりて行く石段が見えるだろう。お前が、その石段をおりきるとね、おおひろま大広間が三つならんで

いるんだよ。その大広間を通って行くのだが、その時、がいとう外套がかべにさわらないように気をつけなきやあいけないよ。もしさわったが最後、お前はすぐに死んでしまうからね。そうして、その大広間を通りぬけると、くだものぼたけ果物畠があるのだよ。その中をまた通りすぎると、つきあたりに穴ぐらがある。その中に一つのランプがとぼっているからね、そのランプをおろして、中の油を捨すてて持ってお帰り。」

まほう使はこう言いながら、おまもりだといって、まほうの指ゆびわ輪をアラジンの指にはめてくれました。そして、すぐに出かけるようにと命めいれい令しました。

アラジンは、まほう使の言った通りにおりて行きました。何も

かも、まほう使が言った通りのものがありました。アラジンは三つの大広間と果物畠を通りぬけて、ランプのあるところまで来ました。そこで、ランプをとって油を捨てて、だいじにふところにしまってから、あたりを見まわしました。

アラジンは、ゆめにさえこんな見事な果物畠を見たことがありませんでした。なっている果物がいろいろさまざまの美しい色をしていて、まるでそこら一面、すいしやうにじが立ちこめたように見えるのです。すきとおって水すいしやう晶すいしやうのようなもありました。まっ赤かな色をしていて、ぱちぱちと火花をちらしているのもありました。そのほか緑、青、むらさき、だいたい色ななどで、葉はみんな金と銀とでできていました。この果物は、ほんとうはダイヤモンド

や、ルビーや、エメラルドや、サファイヤなどという宝^{ほう}石^{せき}だったのですが、アラジンには気がつきませんでした。けれども、あんまり見事だったものですから、帰りにこの果物をとって、ポケットに入れておきました。

アラジンがやつと石段の下までたどりついた時、地の上では、まほう使が一心に下の方を見つめて待っていました。そしてアラジンが石段をのぼりかけると、

「早く、ランプをおよこし。」と言って、手をのばしました。

「私が持つて出るまで待つてくださいいな。出たらすぐにあげますから。ここからじゃとどかないんですもの。」と、アラジンは答えました。

「もっと手を持ち上げたらとどくじゃないか。さあ、早くさ。」
おじいさんは、おこった顔かおをしてどなりつけました。

「すっかり外へ出てから渡しますよ。」アラジンは同じようなことを言いました。

すると、まほう使は、はがゆがつてじだんだをふみました。そして、ふしぎな粉をたき火の中へ投げこみました。口の中で何かぶつぶつ言いながら。そうすると、たちまち石がずるずるとふたをしてしまい、地面の上へかえる道がふさがってしまったのでした。アラジンはまっ暗な地の下へとじこめられてしまいました。

これで、そのおじいさんは、アラジンの伯父さんではないということがはっきりとわかりました。このまほう使は、まほうの力

によつて遠いアフリカで、このランプのことをかぎつけたのでした。このランプは大へんふしぎなランプなのです。そのことは、読んでゆくにしたがつて、だんだん皆さんにわかつてくるでしょう。しかし、このまほう使は、自分でこのランプをとりに行くことはできないのでした。だれかほかの人がとつて来てやらなければ、だめなのでした。それで、アラジンにつきまとつたわけですから、ランプさえ手に入ったら、アラジンを殺ころしてしまおう、と思つていたのでありました。

けれども、すっかりあてがはずれてしまいましたので、まほう使はアフリカへ歸つてしまいました。そして長い長い間、しなへは、やつて来ませんでした。

さて、地の下へとじこめられたアラジンは、どこかにげ道はないかと、あの大広間や果物畠の方へ行ってみました。地面の上へかえって行く道はどこにもありませんでした。二日ふつかの間アラジンは泣きくりました。そして、どうしても地の下で死んでしまわなきやならないのだと思いました。そして、両方の手をしつかりとにぎりあわせました。その時、まほう使がはめてくれた指輪にさわったのでした。

すると、たちまち大きなおばけが、床ゆかからむくむくとあらわれ出て、アラジンの前に立ちはだかりました。そして、

「坊ちゃんぼっ、何かご用でございますか。私は、その指輪の家来けらいでございます。ですから、その指輪をはめていらっしゃる方のおつ

しやる通りに、しなければならぬのでございます。」と、言うのです。アラジンとはび上るほどよろこびました。そして、「私の言うことなら、どんなことでも聞いてくれるんだね。よし、じゃ、こんなおそろしいところからすぐつれ出してくれ。」と、こうたのみました。

そうすると、すぐに地面へ上る道が開きました。そして、あつというまに、もう自分の家の戸口まで帰っていました。お母さんがアラジンが帰ったので、涙を流してよろこびました。アラジンもお母さんにだきついて、何度も何度もキッスしました。それから、お母さんにこの間からのいちぶしじゅうを話そうとしましたが、お腹が^{なか}ぺこぺこでした。

「お母さん、何かたべさせてくださいな。私はお腹がぺこぺこで死にそうなんです。」と、アラジンが言いました。

お母さんは、

「ああ、そうだろうとも、ねえ。だがこまったよ、もう家の中には、少しぽつちの綿わたよりほかには何にもないんだよ。ちよつとお待ち、この綿を売りに行つて、そのお金で何か買つて来てあげよう。」と、言いました。

するとアラジンは、

「お母さん、待つてください。いいことがあります。綿を売るよりも、この、私の持つて帰つたランプをお売rinaさいな。」と言つて、あのランプを出しました。

けれども、ランプは大へん古ぼけていて、ほこりまみれでした。少しでもきれいになったら、少しでも高く売れるだろうと思つて、お母さんはそれをみがこうとしました。

しかし、お母さんが、そのランプをこするかこすらないうちに、大きなまつ黒いおばけが、床^{ゆか}からむくむくと出て来ました。ちやうど、けむりのように、ゆらゆらとからだをゆすりながら、頭が天じようへとどくと、そこから二人を見おろしました。

「ご用は何でございますか。私はランプの家来でございます。そして私はランプを持っている方の言いつけ通りになるものでございます。」と、そのおばけが言いました。

アラジンのお母さんは、このおばけを見た時、こわさのあまり

気をうしなつてしまいました。アラジンは、すぐお母さんの手からランプを引つたくりました。そしてふるえながら、自分の手に持つていました。

「ほんの少しでもいいから、たべるものを持つておいで。」

アラジンは、やつぱりふるえながら、こう言いました。おそろしいおばけが、やつぱり天じようからにらみつけていたものからです。が、その時、ランプの家来は、しゅつとけむりを立てて消えてゆきました。けれども、またすぐに、金のお皿さらの上に上等のごちそうをのせて、あらわれて来ました。

この時、アラジンのお母さんは、やっと気がつきました。けれども、このごちそうをたべるのを、大へんこわがりました。そし

て、すぐにランプを売ってくれと、アラジンにたのみました。あのおばけが、きつと何か悪いことをするにちがいないと考えたものですから。けれどもアラジンは、お母さんのこわがっているのを笑いました。そして、このまほうのランプと、ふしぎな指輪ゆびわの使い方がわかったから、これから、この二つをうまく使って、くらしむきのたすけにしようと思う、と言いました。

二人は金のお皿を売って、ほしいと思っていたお金を手に入れました。そして、それをみんな使ってしまった時、アラジンはランプのおばけに、もつと持って来いと言いつけました。こうして、親子は何年も何年も楽しくくらしていました。

さて、アラジンの住んでいる町にあるお城しろの王さまのお姫ひめさまは、大へん美しい方だということでした。アラジンも、このうわさを聞いていましたので、どうにかしてお姫さまを一度おがみたいと思っていました。それで、いろいろお姫さまをおがむ方法を考えてみましたけれど、どれもこれもみんなだめらしく思われるのでした。なぜかというと、お姫さまは、いつも外へお出ましになる時は、きまったように、深々とベールをかぶっていらつしやったからであります。けれども、とうとう、ある日、アラジンは王さまの御殿ごてんの中へ入ることができました。そして、お姫さまがゆどのへおいでになるところを、戸のすきまからのぞいてみました。

それからアラジンは、お姫さまの美しいお顔が忘れられませんでした。そしてお姫さまがすきですきでたまらなくなりました。お姫さまは夏の夜のあけ方のように美しい方でした。アラジンは家へ帰って来て、お母さんに、

「お母さん、私はとうとうお姫さまを見て来ましたよ。お母さん、私はお姫さまをおよめさんにしたくなりました。お母さん、すぐに王さまのお城へ行って、お姫さまをくださるよう^{ねが}にお願いしてください。」と言って、せがみました。

お母さんは、息子のとほうもない望みを聞いて笑いました。そしてまた、アラジンが気持ちがいいになったのではないかと思つて、心配もしました。しかし、アラジンはお母さんが「うん」と言う

までではせがみ通しました。

それで、お母さんは、あくる日、王さまへのおみやげに、あのまほうの果物をナフキンにつつんで、ふしようぶしようにお城へ出かけて行きました。お城には、たくさんの人たちがつめかけて、うったえごとを申し出ておりました。お母さんは何だかいじけてしまつて、進み出て自分のお願いを申し上げることができませんでした。だれもまた、お母さんに気がつきませんでした。そうして、毎日々々、お城へ出かけて行つて、やつと一週間めに王さまのお目にとまりました。王さまは^{だいじん}大臣に、

「あの女は何者だな。毎日々々、白いつつみを持って、来てるよ
うだが。」と、おたずねになりました。

それで大臣は、お母さんに王さまの前へ進むように申しました。お母さんは、少し進んで、地面の上へひれふしてしまいました。

お母さんは、あんまりおそれ多いので、何も言うことができませんでした。けれども、王さまが大そうおやさしそうなので、やっと勇氣^{ゆうき}を出して、アラジンにお姫さまをいただきたいとお願いしました。それから、

「これはアラジンが王さまへのささげ物でございます。」と言って、まほうの果物をつつみから出して、さし上げました。

あたりにいた人々は、こんなにっぱな果物を生れて一度も見たことがなかったのですから、びつくりして声を立てました。果物はいろいろさまざまに光りかがやいて、見ている人たちがまぶ

しがるほどでした。

王さまもおおどろきになりました。そして大臣を別のへやへお呼びになつて、

「あんなすばらしいささげ物をする事ができる男なら、姫をやつてもいいと思うが、どうだろうな。」と、ご相談そうだんなさいました。

ところが大臣は、ずっと前から、お姫さまを自分の息子のおよめさんにしたいと思つていたものですから、

「そんなにいそいで約束をあそばさないで、もう三月みつきほど、待たせなさいまし。」

と、申し上げました。王さまも、なるほどそうだと思ひになり

ました。それで、アラジンのお母さんに、もう三月待ったら、姫をやるう、とおっしゃいました。

アラジンは、お姫さまがただけると聞いて、自分くらい仕合せ者はないと思いました。それから、一日々々が矢のように早くすぎてゆきました。ところが、それから二月もすぎたある夕方、町じゅうが大そうにぎやかなことがありました。アラジンは何事かと思つて人にたずねました。するとその人は、今晚、お姫さまが、大臣の息子のところへおよめにいらつしやるからだ、と教えてくれました。

アラジンはまっ赤になつておこりました。そしてすぐ家へ歸つて、まほうのランプをとり出してこすりました。すると、じきに

あのおばけが出て来て、何をいたしましたでしょうかと聞きました。

「王さまのお城へ行つて、お姫さまと、大臣の息子をすぐつれて来い。」と、言いつけました。

たちまちおばけは御殿へ行つて、二人をつれて歸つて来ました。そしてこんどは、

「大臣の息子をこの家からつれ出して、朝まで外で待たしておけ。」と、めいれい命令しました。

お姫さまはこわがつて、ふるえていました。けれども、アラジンは、けつしてこわがらないでください、私こそはあなたのほんとうのおむこさんなのでございます、と申し上げました。

あくる朝早く、アラジンの言いつけた通りに、おばけは、大臣

の息子をつれて家の中へ入って来ました。そして、お姫さまと一しよにお城へつれて帰りました。

それからまもなく王さまが、

「お早う。」と言って、お姫さまのおへやへ入っていらつしやいますと、お姫さまは涙をぽろぽろこぼして泣いていらつしやいました。そして大臣の息子は、ぶるぶるふるえていました。

「どうしたのかね。」と、王さまがおたずねになりました。けれども、お姫さまは泣いていて、何にもおつしやいませんでした。

その晩もまた、同じようにアラジンはおばけに言いつけて、二人をつれて来させました。そしてもう一度、大臣の息子を家の外に立たせておきました。

次の日もやはり、お姫さまが泣いていらつしやるのを見て、王さまは大そうおおこりになりました。そして、お姫さまが何を聞いても、やっぱりだまつていらつしやるので、なおなおおこつておしまいになりました。

「泣くのをおやめ、そして早くわけをお話し。話さないと殺してしまうよ。」と、おしかりになりました。

それで、やつとお姫さまは、おとといの晩からの出来事を、すっかりお話しになりました。大臣の息子はふるえながら、どうぞおむこさんになるのをやめさせてくださいまし、とお願ひしました。もうもう一晩だつて、あんな目にあうのは、いやだと思つたものですから。

そういうわけで、ご婚礼こんれいはおとりやめになりました。そして
いろんなお祝いもないことになりました。

さて、いよいよ約束の三月の月日がたつてから、アラジンのお
母さんは、王さまの前へ出ました。それで、やっと王さまは、お
姫さまをこの女の息子にやると、お約束なすつたことを、お思い
出しになりました。

「それでは、わしが言った通りにすることにしよう。だが、わし
の娘むすめをおよめさんにする者は、四十枚の皿さらに宝石を山もりにして、
それを四十人の黒んぼのどれいに持たせてよこさなければいけな
い。そして王さまの召使らしい、りっぱな着物を着た西洋人のど
れいが、その黒んぼのどれいの手を引いて来るのだぞ。」

と、おっしやいました。

アラジンのお母さんは、こまつたことになったと思ひながら家へ歸つて来て、アラジンに王さまのお言葉をつたえました。

「アラジンや、そんなことは、とてもできないことじゃないかね。」

そう言つてため息をつきました。^{いき}するとアラジンは、

「いいえ、お母さん、だめじやありませんよ。王さまにはすぐおせの通りにしてごらんに入れますよ。」と、いさぎよく言いました。

それから、まほうのランプをこすりました。そしておぼけが出て来た時、宝石を山もりにした四十枚のお皿と、王さまが言われ

ただけのどれいをつれて来いと言いつけました。

さて、それから、このりっぱな行^{ぎょうれつ}列が町を通ってお城へ向

いました。町じゅうの人々はそろそろと見物に出て来ました。そしてみんな、黒んぼのどれいが頭の上にのせている、宝石を山もりにした金のお皿を見て、びっくりしました。お城へついて、どれいたちは王さまに宝石をさし上げました。王さまはずいぶんおどろきになりましたけれど、また大そうおよろこびになって、アラジンとお姫さまとがすぐに婚礼するようにとおっしゃいました。

お母さんが帰って、このことをアラジンにつげますと、アラジンは、すぐにはお城へ行かれないと言いました。そして、まずラ

ンプのおばけを呼んで、香水こうすいぶろと、王さまがお召しになるような金のぬいとりのある着物と、自分のお供をする四十人のどれいと、お母さんのお供をする六人のどれいと、王さまのお馬よりもつと美しい馬と、そして、一万枚の金貨を十箇このさいふに分けて入れて持って来いと命じました。

さて、これらのものがみんななどのつてから、アラジンに着物を着かえてお城へ向いました。そして、りっぱな馬に乗って四十人のどれいを召しつれて行くみちみち、両がわに見物しているたくさんの人たちに、十箇のさいふから金貨をつかみ出しては、ばらばらとまいてやりました。見物人たちは、きやつきやつと言つて大よろこびで、それを拾いました。しかし、その中のだれにだ

って、昔、町でのらくらと遊んでばかりいたなまけ者が、こんなになったとは気がつきませんでした。これはきつと、どこかの国の王子さまだろうと思っていました。

こんなものものしいありさまで、アラジンがお城へつきますと、王さまはさつそくお出迎えになって、アラジンをおだきになりました。それから家来たちに、すぐお祝いの宴会えんかいと、婚礼の用意をするようにとおっしゃいました。するとアラジンは、

「陛下へいか、しばらくお待ちくださいまし。私はお姫さまがお住みになる御殿ごてんを立てますまでは、婚礼はできません。」と、申し上げたのであります。

そうして、家へ帰って、もう一度ランプのおばけを呼びよせま

した。そして、

「世界一のりっぱな御殿を作れ。その御殿は、大理^{だいりせき}石と、緑色の石と、宝石とで作らなければいけない。そしてまん中に、金と銀とのかべとまどが二十四ついている大広間を作るのだ。それからそのまどは、ダイヤモンドだの、ルビーだの、そのほかの宝石でかざらなければいけない。けれども、たった一つだけは何にもかざりをしないで、そのままにしておけ。それから、また馬やも作らなければいけない。そして、御殿の中には、たくさんのだれいもないなければいけない。さあ、これだけのことを早くやってくれ。」

と、言いつけました。

あくる朝、アラジンは、世界一かと思われるほどの御殿が立っているのに気がつきました。御殿の大理石のかべは、朝日の光を受けて、うすもも色にそまっていました。まどには宝石がきらめいていました。

アラジンはさっそく、お母さんと一しよにお城へまいりました。そして、きょう婚礼をさせていただきたいと申し入れました。お姫さまはアラジンをごらんになって、アラジンと仲よくしようとお思いになりました。町じゅうはお祝いで大にぎわいでした。

そのあくる日は、王さまの方からアラジンの新御殿をおたずねになりました。そしてまず大広間へお通りになって、金の銀のかべと、宝石をかざりつけたまどをごらんになって、大へんご

かんぶく
感服なさいました。そして、

「これは世界で一ばん美しい御殿にちがいない。わしには、この御殿の中にあるたった一つのものでさえ、世界第一の宝物のように思われる。だが、ここにたった一つ、かざりつけをしてないまどがあるのは、どういうわけだね。」

と、おたずねになりました。するとアラジンが、

「陛下、それは、陛下のとうといお手で、かざりつけをしていただきたいと存じまして、わざわざ残しておいたのでございます。」と、お答えしました。

王さまは、大へんおよろこびになりました。そしてすぐにお城の装飾そうしよくがかりの人たちに、このまどをほかのまどと同じよう

にかぎりつけるように、お言いつけになりました。

装飾がかりの人たちは、何日も何日も働きました。そして、まだ、まどのかぎりつけが半分もできないうちに、持っていた宝石をすっかり使ってしまった。王さまにこのことを申し上げますと、それでは自分の宝石をみんなやるから使うように、とおっしゃいました。それを、使いはたしても、なおまどは出来上がりませんでした。

それで、アラジンは、かかりの人たちに仕事をやめさせて、王さまの宝石を全部返してしまいました。そして、その晩もう一度ランプのおばけを呼びました。それで、まどは夜のあける前に出来上がりました。王さまと、装飾がかりの人たちは、おどろいてし

まいりました。

けれども、アラジンはけっして自分のお金持であることをじま
んしませんでした。だれにでもやさしく、礼儀^{れいぎ}ただしくつきあっ
ていました。そして貧乏人にはしんせつにしてやりました。それ
でだれもかれもアラジンになつきました。アラジンは、また王さ
まのために、何度も何度も、戦争に行つててがらを立てました。
それで、王さまの一番お気に入りの家来になりました。

けれども、遠いアフリカでは、アラジンをいじめる悪だくみが、
ずっと考えつづけられていました。あの伯父さんだといつてだま
した悪者のおじいさんのまほう使は、まほうの力によつて、自分

が地の下へとじこめてしまった男の子が、あれから助かつて、大へんな金持になったということを知ったからであります。そして、おこつて自分のかみの毛を引きむしりながら、

「あいつめ、きつとランプの使い方をさとしたのにちがいない。

おれは、ランプをとり返す方法を考えつくまでは、いまいましくつて、夜もおちおちねむることができない。」

と、どなつていたのであります。

それから、やがてまた、しなへやつて来ました。そしてアラジンの住んでいる町へ来て、すばらしい御殿を見ました。御殿があんまり美しいのと、アラジンがお金持らしいのに腹が立つて、息いきがとまってしまふほどでした。そこで、まほう使は商しょうにん人にば

けました。そして、たくさんの銅どうで作ったランプを持って、
「ええ、新しいランプを古いランプととりかえてあげます。」

町から町へ、こう言いながら歩きました。

この呼び声を聞いて、町の人たちは、ばかげたことだと笑いながらも、めずらしそうにまほう使のそばへたかつて来ました。こんなことを言う男は、氣ちがいかもしれないと思ったものですか
ら。

ちょうどこの時、アラジンのはかりに出て、るすでした。お姫さまはただ一人、大広間のまどによりかかつて、外の景色けしきをながめていらつしやいました。町から聞えてくる呼び声が、耳に入った
ものですから、さっそくどれいをお呼びになりました。そして、

「あれは何と言っているのか聞いておいで。」と、おつしやいました。

すぐにどれいは聞いて帰つて来ました。そして、さもさもおかしくてたまらないというふうに笑いながら、

「ずいぶん、へんなおじいさんなのでございますよ。新しいランプを古いランプととりかえてあげます、と申すのでございます。そんなばかげたあきないがございますでしょうかねえ。ほほほ……」と、申し上げたのでございました。

お姫さまも、これをお聞きになつて、大そうお笑いになりました。そして、すみの方のかべにかかつていたランプを、指さしになつて、

「そこにずいぶん古ぼけたランプがあるじゃないか、あれを持って行つて、そのおじいさんが、ほんとうにとりかえてくれるかどうか、ためしてごらん。」と、おつしやいました。

どれいはランプをとりおろして、町へ走つて行きました。まほう使は、まほうのランプを両手でしつかり受けとつてから、

「どれでも、おすきなのをもちください。」

と言つて、新しい銅のランプをたくさんらべたてました。そして古いランプをだいじそうにだきしめて、ほかのことは何にも気がつかない様子ようすでありました。このどれいが、新しいランプをみんな持つて行つたつて、きつと気がつかнаかつたでしょう。

それからまほう使は、少し歩いて、町はずれへ出ました。そし

て、だれも通っている人がないのを見すまして、まほうのランプをとり出しました。そしてしずかにこすりました。するとたちまち、あのおばけが、目の前へ立ちはだかつて、「何のご用ですか。」と聞きました。

「お姫さまを入れたまんま、アラジンの御殿を、アフリカのさびしいところへ持って行つて立ててくれ。」と、まほう使が言いしました。

すると、またたくまにアラジンの御殿は、お姫さまや、家来たちを入れたまんま、見えなくなつてしまいました。まもなく、王さまが、お城のまどから外をおながめになつて、アラジンの御殿がなくなつているのにお気づきになりました。

「しまった。アラジンはまほう使だったのだな。」

王さまはこうおっしゃって、すぐに家来を召して、アラジンをくさりでしばってつれて来い、とお命じになりました。家来たちは、かりから帰って来るアラジンに行きあいましたので、すぐにつかまえて、王さまの前へつれて来ました。町の人々は、アラジンになついていたものですから、アラジンが引かれて行くそばへよって来て、どうか、ひどい目にあわないようにと、おいのりをしてくれました。

王さまはアラジンをごらんになって、大へんおしかりになりました。そして家来に、すぐアラジンの首を切れとおっしゃいました。けれども、町の人たちがお城へおしかけて来て、そんなこと

をなすつたら、しようちしません、と行って王さまをおどかしました。それで仕方なく王さまは、アラジンのくさりをといっておやりになりました。

アラジンは、どうしてこんな目におあわせになったのかと、王さまにおたずねしました。王さまは、

「かわいそうに、何にも知らないのか。まあここへ来てごらん。」と、おおせになりました。

そしてアラジンをまどのところへつれて来て、アラジンの御殿が立っていたところが原っぱになっているのを、指さして教えておやりになりました。

「お前の御殿はともかく、姫はどこへ行ったのだろう。わしのだ

いじなだいいじな娘はどこへ行つたのだらう。」と言つて、王さまはお泣きになりました。

アラジンはおどろきのあまり、しばらくは口がきけませんでした。どこへ御殿が行つてしまったのだらうかと、原っぱを見つめたまんま、だまつて、ぼんやり立っていました。

しかし、しばらくして、やつと口をきりました。

「陛下、どうか私にひとつき一月のおひまをくださいませ。そして、もしもその間に私がお姫さまをつれもどすことができませんでしたらば、その時、私をお殺しになつてくださいます。」と、申し上げたのであります。

王さまはおゆるしになりました。アラジンはそれから三日の間

は、気持ちがいのようになって、御殿はどこへ行つたのでしょうか、とあう人ごとにたずねてみました。けれども、だれも知りませんでした。かえつて、アラジンが悲しんでいるのを笑ったりしました。それでアラジンは、いつそ身を投げて死のうと思つて、川のほとりへ行きました。そして、土手^{どて}にひざまずいて、死ぬ前のおいのりをしようとして、両手をしっかりとにぎりあわせました。

その時、知らずにまほうの指輪^{ゆびわ}をこすつたのでした。するとたちまち、指輪のおばけが目の前につつ立ちました。

「どんなご用でございます。」と、言うのです。アラジンは大それうよろこびました。そして、

「お姫さまと、御殿を、すぐにとり返して来てくれ、そして私の

命を助けてくれ。」

と、たのみました。ところが、指輪の家来は、

「それは、あいにく、私にはできないことでございます。ただ、ランプの家来だけが、御殿をとりもどす力を持っているのでございます。」と、答えたのであります。

「それでは、御殿があるところまで私をつれて行ってくれ。そして、お姫さまのへやのまどの下へ立たせてくれ。」

アラジンは仕方がないので、こうたのみました。この言葉を、言いきってしまったいうちに、もうアラジンはアフリカについて、御殿のまどの下に立っていました。

アラジンは大へんくたびれていたものですから、そこでぐっす

り寝^ねこんでしまいました。しかし、ほどなく夜が起きて、小鳥の鳴く声で目をさしました。その時は、もうすっかり、もとのような元気になっていました。そして、こんな悲しい目にあうのは、きつとまほうのランプがなくなつたせいにはない、だれがぬすんだかを見とどけなければならぬ、と、かたく決^{けつ}心^{しん}しました。

さて、お姫さまは、この朝は、ここへつれて来られてからはじめて、きげんよくお目ざめになつたのでした。太^{たい}陽^{よう}はうらうらとかがやいて、小鳥は楽しそうにさえずっていました。お姫さまは、外の景色^{けしき}でもながめようと思つて、まどの方へ歩いておいでになりました。そして、まどの下にだれか立っている者があるのを、ごらんになりました。よくよく見ると、それはアラジンであ

りました。

お姫さまは声を立てておよろこびになって、いそいで、まどをお開きになりました。この音でアラジンは、ふっと上を見上げたのであります。

それから、アラジンは、いくつもいくつもの戸をうまく通りぬけて、お姫さまのへやへ入って行きました。そして、うれしさのあまり、お姫さまをしばらくだきしめていましたが、やがて顔を上げて、

「お姫さま、あの大広間のすみのかべにかけてあった、古いランプがどうなったか、ご存じではございませんか。」と、申しました。

するとお姫さまは、

「ああ、だんなさま、私どうしましょう。私がうつかりしていたので、こんな悲しいことになってしまったんです。」と言って、あのおじいさんのまほう使が、商人の風をして来て、新しいランプと古いランプととりかえてあげると言って、こんなことをしてしまったお話をなさいました。そして、

「今も持っていますよ。いつだって、上着うわぎの中へかくして、持ち歩いていきますよ。」と、おっしゃいました。

「お姫さま、私はそのランプをとり返さなきゃなりません。ですから、あなたもどうか私にかせいでくださいませ。今晚、まほう使があなたとご一しよに、ごはんをたべる時、あなたは一番い

い着物を着て、そしてしんせつそうなふうをして、おせじを言つてやつてくださいまし。それから、アフリカのお酒が少し飲さけみたいとおっしゃいます。するとあの男が、それをとりに行きますからね。その時が来たら、私がまたあなたのおそばへ行つて、こうしてくださいませ、と申し上げますから。」

と、アラジンが申しました。

さてその晩、お姫さまは一番いい着物をお召しになりました。そして、まほう使が入つて来た時、にこにこして、いかにもしんせうそうなふうをなさいました。まほう使が、これはゆめではないかと思つたほどでした。なぜかというと、お姫さまは、ここへつれて来られてからというものは、いつもいつも悲しそうな顔を

しているか、そうでない時は、おこった顔をしていらつしやるかでしたから。

「私、たぶん、アラジンは死んでしまったのだらうと思いますの。ですから、私、あなたのおよめさんになりたいと思っています。まあ、それはともかく、さあ、ごはんにしましょう。おや、きょうもやつぱり、しなのお酒ですね。私、しなのお酒にはもうあいてしまいましたから、アフリカのお酒を持って来てくださいな。」

と、お姫さまがおっしゃいました。

アラジンは、そのまに、粉を用意して来て、お姫さまに、ご自分のおさかずきの中へ入れてください、とたのみました。そして、

まほう使がアフリカのお酒を持って帰って来た時、お姫さまは、粉を入れたおさかずきに、そのお酒をなみなみとおつぎになりました。そして、これから仲よくなるしるしですから飲んでください、と言つて、まほう使におさしになりました。まほう使はよろこんで、それに口をつけました。しかし、それをみんな飲みほさないうちに、床ゆかの上にたおれて死んでしまいました。

アラジンは、かくれていた次のへやからとんで出て来て、まほう使の上着の中をさがしまわしました。そして、まほうのランプをとり出して、大よろこびでそれをこすりました。

おばけが出て来ますと、すぐに御殿をしなへ持つて帰つて、もとの場所に立てるようと言いつけました。

次の朝、王さまは大そう早く目をおさましになりました。王さまは悲しくておねむりになることができなかったのです。そして、まどのところへ行つてごらんになると、アラジンの御殿が、もとのところに立っているではありませんか。王さまは、うそではないかとお思ひになりました。それで何べんも何べんも目をこすつては、じつと御殿の方をごらんになりました。

「ゆめではないのかしら。朝の光を受けて前よりももっと美しく見える。」とおっしゃいました。

それからまもなく、馬に乗つて、アラジンの御殿をさして、走つていらつしやいました。そして、アラジンとお姫さまとを両手にだきしめて、およろこびになりました。二人はアフリカのまほ

う使の話をしてお聞かせしました。アラジンはまた、まほう使の死がいもお目にかけました。

それからまた、昔のような楽しい日がつづきました。

しかし、まだもう一つアラジンに心配が残っていました。それは、アフリカのまほう使の弟も、おとうとやつぱりまほうを使っていたからです。そして、その弟は、兄さんよりももっと悪者だったからであります。

はたして、その弟がかたきうちのために、しなへやって来ました。アラジンをひどい目にあわせて、まほうのランプをぶんどつて来ようと決心して来たのであります。そして、しなへつくとす

ぐに、こつそり、まずファティマというあま尼さんをたずねて行きました。そして、上着とボールとを、むりやりにかしてもらいました。それから、このことがほかの人に知られてはいけないと思って、尼さんを殺してしまいました。

さて、この悪者のまほう使は、尼さんの上着とボールとをつけて、アラジンの御殿の近くの町を通りました。町の人々は、ほんとうの尼さんだと思って、ひざまずいてその上着にキツスしました。

まもなく、お姫さまは、ファティマが町を通っているというところをお聞きになりました。それで、すぐ御殿へ来てくれるようにと、使をおやりになりました。お姫さまは、ファティマをしじゅ

う見たい見たいと思つていらつしたものですから、尼さんが来た時、大へんていねいにおもてなしなさいました。そして大広間へつれておいでになつて、同じ長いすに腰こしかけながら、

「このへやがお氣に召しまして。」と、お聞きになりました。

まほう使はべールを深くかぶつたままで、

「ほんとうに、目がさめるほどおきれいでございますこと。ですけども、私このおへやに、たった一つほしいと思うものがございますのよ。それはほかでもございません、ロック鳥ちようの卵が、あの高い天じょうのまん中からぶらさがっていたら、もう申し分なしだと思ひますわ。」と、答えました。

これをお聞きになつてお姫さまは、何だか急に、この大広間が

ものたりないように思いはじめになりました。そして、アラジンが入って来た時、大へん悲しそうな顔をしていらつしました。アラジンは、何事が起つたのですか、とたずねました。お姫さまは、

「私、この天じようから、ロック鳥の卵がぶらさがっていなきやあ、何だか悲しいんですもの。」と、おつしやいました。

「そんなことなら、ぞうさないじやございませんか。」と、アラジンはこともなげに言つてランプをおろして、廊下^{ろうか}へ出てあのおばけを呼びました。

けれども、ランプのおばけは、その命令を聞くと、大へんおこりました。顔をぶるぶるふるわせながら、アラジンをしかりつけ

ました。

「大ばか者、そんなものを私がやられると思っ
ているのか。お前は私のご主人を殺して、あ
の天じようからぶらさげてくれとい
うのか。そんなばかは、死んでしま
うがいいや。」

おばけの目は、まるで石炭がも
えている時のように、まっ赤にな
っていました。しかし、やがて言
葉をやわらげて、

「だけれども、それはお前の心から
出た願いでないということを、
私はよく知っているのだよ。それは
尼さんあまの風をしている、
悪者のまほう使が言わせたのだ
ろう。」

と、言いました。そして、おばけ
は消えました。アラジンはお姫さ
まが待っているへやへ、いそいで
行きました。そして、

「私は、ずつうがしてなりません。尼さんと呼んでくださいませんか。あの方のお手でさすっていただいたら、きつとなおるだろうと思います。」と、お姫さまに申しました。

すぐに、にせのファティマが来ました。アラジンとはびついて、その胸へ、短刀たんとうをつきさしました。

「どうなすつたのです。まあ、あなたは尼さんを殺すのですか。」お姫さまは泣き声でとがめました。

「これは、尼さんではございません。これは私たちが殺しに来たまほう使です。」と、アラジンが申しました。

こんなにして、アラジンは二人の悪いまほう使の悪だくみからのがれました。そして、もうこの世の中には、だれもアラジンの

仕合せのじやまをする者はなくなりました。

アラジンとお姫さまは、長い間たのしくくらししました。そして、王さまがおかれになった時、二人はどうとう、王さまとおきさきさまになりました。そして国をよくおさめました。いつまでもいつまでもその国はさかえたということです。

青空文庫情報

底本：「アラビヤナイト」主婦之友社

1948（昭和23）年7月10日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：京都大学点訳サークル

2004年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

アラビヤナイト

一、アラジンとふしぎなランプ

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 菊池寛

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>